

私の昭和二十年

池田 茂太

昭和20年、私は美唄国民学校高等科を卒業する年だった。級友たちは家業を継ぐ者、他に就職する者、志願して予科練や他の少年兵として戦争に参加する者、進学する者、それぞれ希望に満ちていた。戦火が身近に迫っていたのに、新聞の戦況報道も真実を伝えていなかったようだから、わりあいとのんきに過ごしていたと思う。

私は親の希望や先生の勧めもあり、美唄工業学校に進学することとなった。入学試験は、3月5日からだったと思うが、吹きさらしの雪原に建った木造校舎の屋内体育館に、志願者全員が整然と座って口頭試問の順番を待っていた。広い体育館にストーブもないのにあまり寒い感じかしなかったように思う。

入学式は、4月1日で、とても雪の多い冬だったので、道路には未だ雪が残っていた。校内は、上級生がほとんど勤労奉仕に動員され、新一年生だけだった。先生も戦争に招集されてしまったのか、校長以下4、5人くらいで、街の薬屋の店主も嘱託教員として私達の生物の授業を受け持っていた。当時は、ノート、鉛筆など十分に買うことができず、工業学校生徒に最も必要な製図機等も全く手に入らず、何人かの級友が先輩から借りて持ってくる製図機が私には宝物のように見えた。教科書も同様で、専門科目の教科書はクラスに2冊しかなく、授業中に黒板に書かれたものを懸命に筆記する毎日だった。

4月29日、天長節^{*1}の式典があるため、上級生も勤労奉仕が休みとなり、登校してきた。私達新入生にとって上級生は本当に恐ろしい存在であり、いつ難題を吹きかけられるかと内心びくびくしていたら、式典終了後に雪の消えたばかりのグラウンドに一年生全員が集められた。自己紹介を兼ねて順番に歌を唄えと命令されたのである。友人のA君は、適当な歌など知らなかったのか「草津節」を唄い出したら、上級生は面白がって「どっこいしょ、どっこいしょ」と大声で囃したてた。あまりの大騒ぎに校長先生の知るところとなり、戦時下の生徒にあるまじき行為であると、一同大変な叱責を受けた。当時は、先生や上級生の言うことは、絶対従わなければならない、道で逢っても必ず敬礼をさせられるなどの厳しい指導があり、これに逆らえば体罰を受けた。列車で通学する者は、いろいろ大変な目にあったようで、クラス会のたびに話題になる。

5月に入って、一年生も勤労奉仕に動員されることとなり、三井美唄鉱業所の各職場に配置された。私は、毎日家から直接職場に通ったが、上級生達は、現在の奥山家具店の裏手にあった「大中」という料亭に合宿させられた。毎朝軍隊式の点呼を受け、整然と隊列を組んで作業現場に向かっていたことを今でも憶えている。私達の仕事は、炭鉱内で使う坑木を運んだり、鉱業所従業員の食糧を確保するため、現在の沼の内西方にあたる泥炭地の原野を開拓し、カボチャを作ったりもした。肥料もなかったので、腐敗したチクワを肥料にしたが、今でもその嫌な匂いを思い出す。毎日が重労働で体も心もぼろぼろになり、何のために学校に行ったのか悔やんだが、この時代は皆が戦争に勝つためだといって頑張った。

このような中にも楽しい思い出もある。戦時下の職場慰問ということで三井美唄の互楽館にオペラ歌手の藤原義江と大谷冽子が訪れ、私達もその美声にうっとり聞き惚れた。

7月に入ってからは、農村地帯への援農作業となり、主に学校近在の有為、沼の内の水田除草をやり、炎天下の除草機押しは特につらかった。昼食は、農家で用意してくれたが、それ

は真っ白い白米のオニギリで、いつもお米の少ししか入ってない代用食しか食べていなかった私達にとっては大変な御馳走であり、腹が苦しいくらいたくさん食べられたのがうれしかった。7月15日の午前中だったか、草取りの最中に、機影は見えなかったが、飛行機の爆音が聞こえ、みんなはあわてて用水路にかがみ込んで身を守った。翌日になって知ったことだが、この日は道内各地に米軍による空襲があり、札幌近郊では列車が機銃掃射を受け、死者が出たとのことであった。美唄では、機影を見ることもなかったが、その後、列車通学の級友の中には空襲警報*2の折に、列車に乗らず、歩いて帰宅した者もいたと聞き、いよいよ戦争も身近に迫ってきたことを強く感じた。

私達は、一週間に2日間だけ学校で授業を受けたが、軍事教練が主体で、学校に配属された将校（中尉）の指導が厳しく、援農作業の方が良いとも思った。

そのころ屋内体育館では、飛行機の機体が製作されており、近くに寄って見ることは禁じられていたので、良く判らなかったが、すべて木製で、壁に立て掛けられていた翼はベニヤ板が張られていた。あとで飛行場に並べて置く用の飛行機であることを知った。

8月に入ってからは、学校でも防空壕を造ることとなり、校庭にある射撃用の築山の側面に穴を掘り、炭鉱の坑道と同じように造ることとなった。級友2人一組みになり、三井美唄から坑木や、坑道を造るのに必要な材料を徒歩で運び、採鉱科の私達は実習を兼ねて幾日もかかって防空壕造りに汗を流した。

8月15日午前中、やっと完成することができた。12時に玉音放送があるので、一同身体を洗い清めてラジオの前に整列するようにと担任の先生から指示があった。学校にラジオがなかったのか、私達は学校の隣に住む森川さん宅のラジオで放送を聞いたが、雑音がはげしく、その内容は良く判らなかった。「絶え難きを堪え、忍び難きを忍んで」という天皇陛下の荘厳なお言葉だけが今でも耳の底に残っている。判らないまま帰宅ししたら日本が英米軍に降伏したのだと教えられ、初めて重大放送の内容を知った。この日は焼け付くような好天であった。しばらく配達されなかった新聞がタブロイド判で配達され、広島、長崎への新型爆弾の投下とポツダム宣言の通知があったことが載っており、夜寝てからも通りに人の足音が絶えなかった。みんな興奮していたのであろう。

9月に入って、動員されていた上級生も学校に戻り、従軍していた先輩や先生もぼつぼつ復員し、校内も賑やかになってきた。教練用の武器を集めて搬出の準備をしたり、軍事色の濃い書類などの焼却をしたりするうちに9月も終わり、落ち着いて机に向かえるようになったのは10月からだったと思う。炭鉱に収容されていた中国人や朝鮮人が街中をゆったりと歩くようになり、得体のしれない進駐軍に接したり、農作物も不作であったりと、とすべてが不安のうちに昭和20年の秋も深まっていった。

(いけだ しげた 昭和5年生まれ)

*1 天長節 戦前の天皇陛下の誕生日の呼称。戦後は、天皇誕生日と改称された。

*2 空襲警報 敵機の飛来をサイレンで知らせる警報。